

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



高等部への渡り廊下からみた校舎

## 群馬県立聾学校に 行ってきました

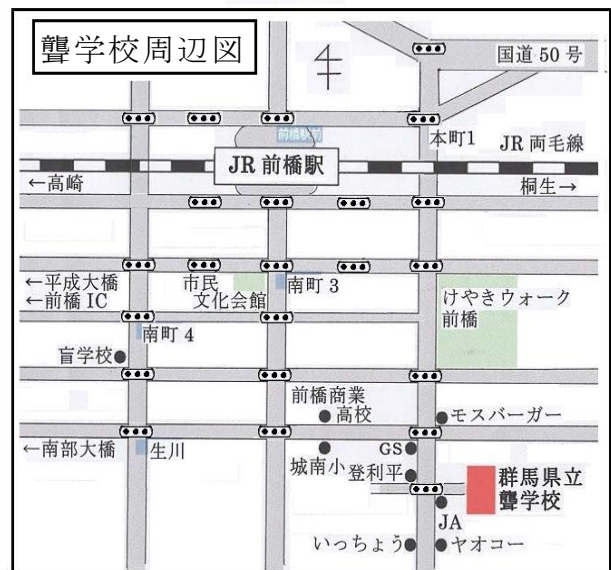
12月中旬の晴れた日に「すなっぷ」取材のために県立聾学校を訪れました。JR前橋駅から直線で南南東に約1km、ショッピングモールけやきウォーク前橋の南400mという立地ですが、大通りから少し入った閑静な住宅街にあります。初めて訪問する私たち取材班は、約束の時間に門前にたどり着いた時にはほっとしました。

門を 들어서 入ってまず感じたことは想像していたよりもずっと広い敷地だということでした。あとでわかったのですが、この学校には幼稚部・小学部・中学部・高等部があり、さらに寄宿舎もありました。そしてとても静かでした。

最初に通された校長室で、岡田明子校長先生から学校の概要についてお話をうかがいました。私たちの質問にもひとつひとつ丁寧に答えていただきました。

### 高等部には情報デザイン科が

令和5年度当初の段階での幼児・児童・生徒数は次表の通りです。



群馬県立聾学校ホームページより転載

部 (年限)	男	女	計
幼稚部 (3)	9	5	14
小学部 (6)	11	15	26
中学部 (3)	11	11	22
高等部普通科 (3)	4	3	7
高等部情報デザイン科 (3)	2	3	5
合計	37	37	74

高等部の情報デザイン科ではコンピューターの操作を学ぶとともに造形デザインなど、創作力を高める授業をしています。廊下には県教育委員会主催のいじめ防止ポスターコンクールの応募作品が掲示されていました。



「魔法の言葉で君の笑顔が一番好きだ」

須永玲緒奈さんの作品  
高校の部で最優秀賞に選ばれた

## 通学範囲は県内全域におよぶ

74人の児童生徒はどこから通ってくるのでしょうか。県内で唯一の聾学校とはいえ、子どもたちが遠くから通うのは大変です。多いのは前橋(16)高崎(10)太田(16)伊勢崎(6)藤岡(5)みどり(5)と、「近い町」や「交通の便がよい町」ですが、みなかみ町や嬭恋村、中之条町などから通っている人があるのには驚きました。「毎日通ってくるのですか」とたずねたところ、校内にある寄宿舎で生活をしている子どもが25人いるとのことでした。

## 子どもたちにとって大切な聾学校とは

「聞こえの障がいがある子どもたちにとって聾学校は学びやすい場所なのではないでしょうか？」と校長先生に聞いてみました。昨今、障がいのある子どもたちも普通学級で学ぶ「インクルーシブ教育」という言葉を聞きます。国連は一昨年(2019年)に日本政府に対して、現状の特別支援教育から「インクルーシブ教育」に転換するよう勧告しました。

校長先生はインクルーシブ教育の意義を認めながらも現状では転換への課題が大きいと

言います。特別支援学校からいったん小学校等に入学した子どもが再び特別支援学校に戻ることもあったとのこと。受け入れる普通学級の様子を想像するとさまざまな困難が目に見えます。

## 聞こえの障がいを乗り越えるために

日本の聾教育の歴史は長いですが、その間に障がいを乗り越えるためのさまざまな方法が考えられたそうです。手話もその一つですが、発音するときの口の形で言葉を読み取る口話も使われるとのことでした。また、補聴器の性能はめざましい進歩をとげている。聴覚を失っていても人工内耳で音を検知することもできる。しかし、補聴器には雑音までも増幅してしまう問題がある。むずかしい。

## 休み時間の静かさに驚きました

4時間目(11:55~12:45)の授業見学に向かうと廊下の中央天井に(非常・勉強・休み)の電光掲示がありました。チャイムの音がよく聞こえない生徒のためにランプで知らせるのだそうです。この時ちょうど休み時間に入りましたが、生徒の騒がしい声がない学校を初めて経験しました。



校長室のある管理部から高等部までの長い渡り廊下の片側(庭側)は全面ガラス張りです。校庭や周りの景色を見渡すことができます。校長先生もこの景色が大好きだそうです。

## 情報デザイン科

最初の参観は情報デザイン科の授業です。まず目に飛び込んできたのは、今日はお休みしている生徒のかわいいお化けの作品。大きな作業机の真ん中で工夫を凝らした何体もの小さなマスコットお化けが迎えてくれました。



授業を受けて作業をしているのは男子生徒 2 人。先生の手話の手伝いもあって私達の質問にもいろいろ答えてくれました。一人は鯉のぼりの卓上の置物、もう 1 人はくもの巣のデザインされた板の制作作業の途中でした。パソコンでデザインするとそれと連動して切断できる機械が教室にあり、作業環境には恵まれているということでした。



## 数Ⅲはド・モアブルの定理

次の授業参観は数学です。教室では先生と生徒が 1 対 1 で数Ⅲの難しい問題を解いていました。黒板の代わりに先生の隣のモニターには難しい数式が書かれていて、数学が得意だという男子生徒がタブレットとノートを見ながら数式を解いていきます。先生の説明もモニターですぐに解説できるので情報機器の発達によってより学びやすくなっていると感じました。ただ最初の校長室での話では画面上だけでは微妙なニュアンスは伝わりづらく、タブレットだけではなく、表情のつく手話は大切だとのことでした。

男子生徒が沈黙して考えていると先生はそれをじっと見ている。生徒がタブレット上で回答すると NO と答える。ふたたび考える。1 対 1 で数Ⅲの難解な「ド・モアブルの定理」問題を解いている静かな教室は、学びの原点を見ているようで羨ましくもありました。



## 美術 粘土のうさぎ

3 番目の授業参観は美術。ここもお休みの生徒がいて 1 対 1 の授業でした。女子生徒が自分で描いたうさぎの絵をもとに粘土でうさぎを作っていました。うさぎのふっくらしたおしりがなかなかうまくいかないと何度もくりかえし形を作っていて、美術はあまり得意ではないと笑いながら話してくれました。光がたっぷり入ってくる美術室で生徒が黙々と指を動かして自分の思いを形にしていく。時々会話しながら穏やかに過ぎて行く時間を楽しんでいるような授業でした。



## 理科 ホールピペットの使い方

最後の参観は理科セミナーの授業です。ホールピペットの使い方の授業で水を吸い上げてビーカーに移すという作業を 3 回繰り返していました。校長先生と 3 人の見学者が入ってきたことと、授業の内容もあり、生徒もやや緊張しているように見えました。先生はプレッシャーをかけないようにといった様子でじっと見守っていました。ここも 1 対 1 の授業なのできめ細やかな指導が受けられると感じました。

## 聾教育の長い歴史の中で



最後に廊下の展示物を見ながら、県立聾学校の長い歴史を説明していただき、聾教育に携わってきた先人のご苦労と、みずからの障がいと向き合い、友と心通わせてともに学び、巣立っていった多くの子どもたちの日々に思いを馳せました。

ちらりと見えた椅子の脚のテニスボールに思わず微笑んでしまいました。騒音・雑音対策でした。Good idea!



## 群馬県立聾学校は令和 6 年度に創立 97 周年を迎えます

校長 岡田明子

群馬県立聾学校は令和 6 年度に創立 97 周年を迎えます。群馬県内で唯一、聴覚に障害のある幼児児童生徒（以下、子ども達）のための特別支援学校です。97 年は、本校が県立盲聾学校となってからの歴史で、昭和 23 年に、県立盲学校と聾学校として分離独立しました。本校の始まりは大正 11 年私立高崎聾聾学校にあります。学校の沿革は本校ホームページに掲載していますので、興味のある方はご覧ください。

本校には、幼稚部、小学部、中学部、高等部があり、3 歳から 18 歳までの子ども達が学んでいます。思いやりのある豊かな心、たくましく生きる力、自ら学ぼうとする態度、進んで社会に参加する力の育成を学校教育目標とし、大人も子どもも互いに切磋琢磨しています。全県から通学する児童生徒の通学を保障するための寄宿舎もあり、自立や助け合いを実践的に学んでいます。さらに、特別支援学校のセンター的機能を果たすため聴覚障害支援センターを設置し、県内のきこえやことばに関する困難を抱えるお子様やご家族、学

校等への支援や相談を行っています。乳幼児の教育相談も行っており、医療機関等と連携して 0 歳児からの相談にも応じています。きこえやことばに関することは、気軽にご相談ください。

各部では、幼稚園、小・中学校、高等学校に準じた教育を行っています。高等部には普通科と情報デザイン科があり、卒業後の進路実現に向けて学んでいます。情報デザイン科ではレーザークラフト等の物作りを通して実践的な職業学習を行っています。最近では、大学等に進学する生徒の割合が増加傾向にあります。また、高等部の生徒全員で、昨年度から全国手話パフォーマンス甲子園に挑戦しています。今年、群馬県が制作する手話動画の撮影にも協力し、積極的に社会参加しています。中学部、高等部では部活動も盛んで、陸上部、卓球部、文化・軽スポーツ部の 3 つの部があります。陸上部と卓球部は、関東や全国の聾学校の大会に出場し、自己の目標に挑戦しています。

### ◆◆◆ 取材を終えて ◆◆◆

文中では「騒がしい声のない学校を初めて経験しました」と書いたのですが、実際の校内では、本当に沢山の子どもたちの声で満ちていたのです。手話や豊かな表情を通し互いの意志を伝え合う様子をあちこちで見ました。数学の難問を前に、先生と息詰まるような対話を進める姿を目の当たりにしました。

そして、取材する私たちの耳には届きにくいこれらの声も、ごくありふれた日常の姿として社会全体が自然に受け入れることこそがインクルーシブな社会のためには必要なのだ、としみじみ感じたのです。

インフルエンザが流行してお休みの生徒が多い中、私たちの取材を快く受け入れてくださってありがとうございました。取材はたくさんの方の学ばう機会となりました。県立聾学校の皆様にご心より感謝申し上げます。

《取材・撮影・文責：堀込康美・朴順子・倉林順一》  
岡田先生